

ヨコハマ人・まち 第6号

～まちの人がまちをつくる～

都市計画局企画調査課では、パートナーシップのまちづくりを進めるため、まちづくりの情報誌「ヨコハマ 人・まち」を発行しています。この情報誌は趣旨に賛同して集まった市民と企画調査課で作っています。

職・商・住のまちづくり ～ 元町仲通り会

前号（第五号）では「向こう三軒両隣のまちづくり」と題して、自治会と地域から見えるまちづくりの可能性を考えました。今回は、商店街活性化だけではとどまらない、職と商と住のまちづくりを目指す、「元町仲通り会」の三浦順治さんに取材してきました。

仲通りは単なる裏通りじゃない

～仲通り会の発足へ

三浦さんのお店は元町の本通りから一本入った「仲通り」にあります。ステンシル加工の技術を生かして幅広く商品開発を手がける三浦さんが、「元町仲通り会」をつくったのが平成5年のことでした。商店が元町から少しずつ仲通りにまで広がってきていた頃です。ある日の飲み仲間との議論が仲通りのまちづくりを考えるきっかけになった、と言います。

「その時飲んでた仲間同士で、かなり真剣な議論になったんですよ。仲通りはこのままでいいのか、ってね。表の本通りに対して「仲通り」は完全に裏通り、でいいのか？ という思いは3人とも強く持っていたんですね。3人とも消防団員だったんですよ（笑）」

そして3人は、仲通りの人がどのくらいまちづくりに関心を持っているか、アンケートを行ってみました。その結果8割がまちづくりに協力したいと思っていること、その中でも「積極的に参加したい」という人が10人以上いるのがわかりました。これならやれるんじゃないかーその10数人が集まって「仲通り会」が始まったのです。

仲通りの個性

～職・商・住のまちづくりへ

元町仲通りは昔から職人の集まるまちだったそうです。居留外国人のための商店が多く軒を連ねた元町で、家具を作る職人などが住んでいたのが仲通りでした。当時から職人、商人、生活者が共存するまちとして元町本通りとは異なる歴史を歩んできたのです。「今は製造業を営むのは僕のところくらいです。でも、仲通りのまちづくりを考えるのに、僕が住人であり、職人であることが、好都合だったんですね。商売人の考え方とも違う。今の仲通りにとって必要なのは商業施設の充実だけではなく、昔からの仲通りの個性を生かしたまちづくりだと感じていました」（三浦さん）

それは、まちづくりの担い手である三浦さんを含めた職・商人にとって、ここが生活の場でもあることと大きく関係しているのではないのでしょうか。元町の本通りは商業施設と生活の場を分けている印象を受けますが、仲通りでは仲通り全体の50パーセントは、ここに住んでいて「住まう」と「つくる」「商う」の場が同じなのです。

ここに「元町仲通りのまちづくり」の原点があるのです。

昨年度、仲通り会で制定したシンボルマークは

「クラフトマン」。ずばり職人です。仲通りのコンセプトを「クラフトマンストリート」と位置づけ、まちづくりのメンバーが考案したものです。昨年行ったアンケートでは、まだ異論もあり、決定とまではいかなかったのですが、仲通り会の思い「仲通りの歴史と個性」をよく表すものだと感じました。

地区計画制度検討委員会発足へ

平成6年の設立準備会から総会を経て、いよいよ元町仲通り会の活動は本格化していきました。元町SS会のアドバイスを受け、平成7年には経済局、都市計画局、建築局との勉強会を行いました。資金面ではこのころから横浜市の住宅地まちづくり支援制度による活動費助成、翌年には県の活性化基金を受けて事業が動き始めました。

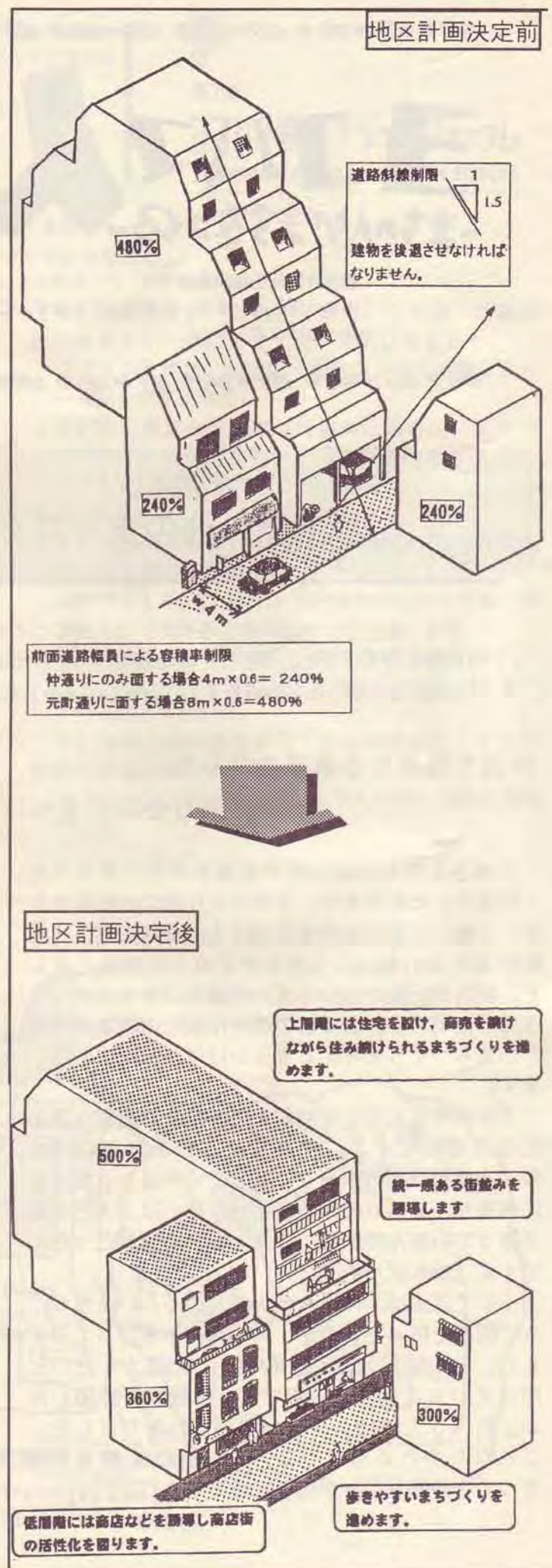
こうした中で、建築局から、まちづくりの手段として「街並み誘導型地区計画制度」を活用したかどうか、との提案があり、その実現に向けて動き出すことになりました。商業と居住の共存する個性的で魅力的なまちづくりをつくり出すために、まちづくりの目標にそった規制と誘導を行うルールを決めることになったのです。地区計画の説明会では、最初は「とにかく専門用語が飛び交うような感じでわかりにくかった」ので、誰にでもわかるように説明してください、と何度もお願いし、建築局でもこれに答えて資料を作り直す、といったことを繰り返し、原案をつくってきたそうです。

「地区計画のアンケートの時、ここで暮らす人たちの思いが本当によく伝わってきました。会の設立の時も、なんで俺に声をかけてくれないんだ、って怒ってきたおじいちゃんがいる、みんな本気で仲通りのことを心配しているんだ、というのがよくわかったんです。地区計画は華やかな事業ではないけれど、今しっかり種をまいておく、土台づくりが大事だと思います。」（三浦さん）

地区計画はこれからのまちづくりに向けての規制・誘導であり、計画ができたからといって今すぐまちが変わるわけではありません。でも、「まだまだ、これから」という役員さんの思いは、確かな目標を見据えている力強さを感じさせてくれました。

仲通りメールの発行

平成8年7月、「花やぐまち事業」を仲通り会ではスタートさせました。庭先、店先を飾った数々の



商住混合地区のまちづくりのルール

(元町仲通り街並み誘導地区地区計画)

元町仲通りに面する商業者や住民をメンバーとした「元町仲通り会」は、「住み続けられる街づくり」と「商店街としての活性化」を目標として街の将来像を検討し、仲通りに面した敷地で建物を建てる時の新しいルールとなる「元町仲通り街並み誘導地区地区計画」を都市計画として決定するよう市に要請しました。

仲通りには、商店や飲食店舗、住宅等が混在して建ち並んでいますが、道路の幅が4m程しか無いため、思うような形で建物が建てられなかったり、容積率を十分に活用することができません。店や住宅を建て替え、街並みを改善しようとしても思うようにできないという問題がありました。

このため、まちづくりの第1歩として、通りに面して新たに建物を建てる場合や建て替える場合のルールを作ったわけです。

ペンシルビルを作らないため通りに面する敷地を一定規模以下に細分化しないこと、仲通りにはキャバレーや風俗営業の店舗等は作らないこと、通りに面した1階部分は最低50センチ後退し店先を広くして歩きやすくすること、建物を4階(10.5m)以上にする場合のその部分は、住宅として使われることを予想し、プライバシーを守り、日当たりや風通し等を確保するために壁の位置を通りから2m入った位置まで下げることなどを基本的なルールとし、これを守ることにしました。

さらに、1階部分を1.0メートル(元町側は1.5メートル)通りから後退させて歩道状にし、1階部分を店舗や飲食店、作業所、事務所等の活気のある用途とし、街並みの連続や演出を工夫する事などの条件を満たすことにより、道路斜線制限や道路の幅員による容積率の制限の緩和を受けることができるようにしました。

守るべきルールが多いと感じられるかもしれませんが、狭い道路に面した商店街を住み続けられるようにし活性化していくためには必要と考えられるルールですし、得られる効果を考えれば、1階部分の後退等も可能ではないでしょうか。

今回は、元町仲通りの地区計画の例を紹介しましたが、同じような課題があり、その解決方法を検討されている地区が多いと思います。

また、人・まちの創刊号では住宅地で地区計画を活用した例を紹介しました。

地区計画にはこのほかにもいくつかのタイプがあります。長い時間をかけてまちづくりをすすめるためにルールづくりをしておくことが必要と感じられたら区や市の担当窓口(建築や都市計画、まちづくりの担当)に相談してみてください。また、近く的设计事務所等で相談ののってもらえるところがあるかもしれません。(谷口)

花は、仲通りのコミュニケーションに一役買ってきただようです。

同じ時期に発行された「仲通りメール」というニュースレターも、アンケートの結果・分析や「温故知新」というコーナーで仲通りの歴史を地元のおじいちゃんに取材したり、お店を紹介するなど、きめの細かい情報提供で元町のコミュニケーションの活性化を促してきました。

三浦さんに頂いた7月号の編集後記には「シンボルマークが不評で困っている。即刻中止せよ、と匿名のはがきが届いた」と苦悩をのぞかせながらも「こうなったら作家の山崎洋子さんに頼んで元町仲通りシンボルマーク殺人事件などという推理小説でも書いてもらおうかと思っている」と三浦さんの懐の深さをかいまみせる文章が掲載されています。「匿名ではなくて、自分の意見を直接僕におつけてほしいんです。きっとその人だって仲通りのことを本気で心配してくれているんですから」と語る三浦さんの人柄が、そのまま仲通り会のまちづくりのスタンスを表しているような気がしてなりません。

柔軟に楽しく

「グリーンガラスストリート in 元町」の提案

昨年(2015)の5月、一部の仲通り会の役員で「グリーンガラスストリート計画」という企画を提案しました。コンセプトは「仲通りが田舎になる」。その企画書の中で、三浦さんは以下のように語っています。

一 仲通り会発足以来、どのように変わっていくのかソフト、ハードの両面から真剣に議論してきました。(中略)我々役員の中の心の中ではありきたりの事業や、小手先のまちづくりに取り組んでも面白くないし、長続きしないであろうという思いは共通に持っています。(中略)今年の年賀状のイラストを眺めていて「仲通りに芝が生えていて、牛が放牧されていたらいいなあ」「車は牛を避けて通るだろうなあ」などと漠然と考えていました。(中略)一部役員の話の中で仲通りに芝生を植える話をしたところ「これは面白い。是非実現させよう」と話が盛り上がり、次から次へとアイデアが浮かんできました。(中略)もちろん問題は山ほどあります。実現にはかなりの労力を要します。我々は「ダメ元」の気持ちでトライしてみようと考えています(以下略)

一 「いや、行き詰まりみたいな時期でしたし、何

か楽しくなるようなことを探していたんですね、無意識に。こういう発想って考えるだけで楽しくなってくるじゃないですか」（三浦さん）。従来の「街路整備計画」の発想とはまるっきり異なる新鮮な発想—この企画書では仲通りを「元町牧草通り」と名付けていました。

笑いながら話す三浦さんですが、今、まちづくりに求められているのはこんな「温かみ」のある「ユニーク」な発想なのではないでしょうか。仲通りへのこだわりが感じられるからこそ、仲間も賛同したのだと感じました。

オール元町で考えていく時期

「元町」と地名の付く地域には全部で5つの団体があります。「元町自治運営会」のエリアに、通りごとに「元町SS会」「元町仲通り会」「代官坂通り会」「川岸通り会」があるのです。

「元町全体をみんなで考えていく時期だし、それが現在の課題ですね」と三浦さんは言います。共存していくまちづくり、とこれを言い換えてもいいかもしれません。昨年の1月から仲通り会では、SS会の協力で「モトマチガイドマップ」を作成したり、事業系ゴミ袋の販売に取り組んできました。

「商店街の活性化」という枠内だけの発想では、なかなかできない連携も、「オール元町」の姿勢でまちづくりを推進していこう、という仲通り会の呼びかけは、これからのまちづくりにとって欠かせない考え方なのだと思います。「たとえば元町地区で複数の団体に入っている人もいます。仲通りに面していればSS会の会員にも参加を呼びかけたりしています。仲通り会は一か月一律会費千円ですけど、他の会に入っている方なんか負担もあるだろうし、そのへんは課題ですね」。会費は悩みの種ですが、会費千円を上回る負担を望まない声も多いのが現状のようです。

今年1月行われたアンケートでは「どのような組織を望みますか」の問いに、「元町商店街は1つ、という考えからSS会の組織に合流する」と「仲通り単独で商店会を組織し、自主独立のカラーを目指していく」が回答者数で半々だったりしますが、「仲通りが地区計画制度の対象になっていることを知っていますか」の問いに対してほとんどの回答者が「知っている」と回答しており、これまでの仲通り会活動の積み重ねが反映されてきているのも事実です。

今後「オール元町」という思いへ向けて、仲通り会の活動はますますカギを握るのではないのでしょうか。

ヒヤリングを終えて

話を聞き終えたわたしたちは、三浦さんと一緒に仲通りのお店へ移動しました。ここのご主人も三浦さんと一緒に仲通り会を支えるメンバーとのこと。こうして仲通りを歩き、お店に入ってみると、あらためてこのまちの魅力を感じずにはいられません。「モノをつくる過程をみせながらお客さんとコミュニケーションするようなまちづくりができたらなあ」と三浦さんは言いました。

仲通りメール（4月号）の編集後記に書かれていた「仲通りもお店が増えてにぎやかになったね、なんて思っていたが、仲通りに住むおじいちゃん、おばあちゃんの話の聞くと、昔はこんなものじゃなかったそうだ。お店が軒を連ね、縁日で人があふれるくらいの街並みに再現したいものだ。そんな思いでまちづくりを手伝っている」という三浦さんの文章を思い出しました。

「これまで僕が会長をしてきたけど、みんなを引っ張っていこうとはそれほど思わないんです。いや、むしろそれじゃうまくいかないんじゃないかと思っています。僕の感覚は「工業」ですが、そろそろ「商業」の方がリーダーとなる時期かもしれません。会ができてまちづくりの基礎をつくるまでは住人でいいのかもしれませんが、次は商人の感性が必要になってくるんじゃないでしょうか」職人のこだわりと柔軟な発想—元町仲通りと元町の未来はどんなふうになるのでしょうか？

「今、一生懸命やっていることの答えはきっと10年後くらいにわかるんじゃないでしょうか。やっぱり地元の人が快適なまちじゃなければお客さんだって楽しくないはずだから」（三浦さん）。一心のこもった人々が町をつくり、心のこもった町が人をつくる—これが元町仲通りのメッセージなのです。（金成）





ひと・まち・横丁 ヒント集

自分たちの住む地域の経済の発展や、住みやすさを考えた時、「居心地のよいまち」「個性のあるまち」「賑わいがあるまち」をつくりたいというのは住む人みんなに共通の思いであるはず。街づくりを実践しようと思っている人のためにいくつか挙げてみました。

1 まず住民どうして話してみる

一人や二人で考えているだけでは、もったいない。案外みんな同じ事を感じているかも。話してみれば「よくしたい」という思いは共通なはず。何人かが世話人になり、自分たちの地域の問題点を話し合う場をつくってみませんか。

2 勉強もしてみよう

地域の要望や方向が見えて来たら、それについての勉強の場をつくりまします。話し合いの中のできた要望や問題を検討しながら、今できそうな事、できない事、将来やりたい事の共通認識を育てて行きます。

自分の地域のローカルな視点を大事にすると共に、隣接する地区の回りを見渡した視点も持たなければいけません。それには自分たちだけで考えているのではなく、専門家を招き、セミナーや勉強会をすることによって補う事ができます。

またセミナーや勉強会、アンケート等の蓄積は、市や県に相談する時に自分たちの思いを伝えるのに役に立ちます。

3 街の独自のカラーをみつけ、地域全体の共通のコンセプトとする。

世代や利害の違う人達にも共有できるような魅力を皆

で探し、育てていく街づくりをしたいものです。

「親しみやすい」「安くて新鮮」または、「お酒落な街」「あそこにはいかなければ買えないものがある」「名産や独自のブランドを持っている」などなど街の魅力を再確認をして、統一されたカラーを打ち出した街づくりをしましょう。

例えば、店の親父の顔というようなもので、訪れた人との接点を大事にする。また来たいというような思いになってもらう。

4 一発のイベントよりも、長く育っていくものを

イベントをする事で、人を集める事はできるが、一過性のものに終わる恐れもあるので、長い目でみた街づくり、居住者も含んだ地域の賑わいを考える。

計画そのものの成果をすぐ期待するのではなく、むしろそこへ至る過程が大事です。

土壌をつくり、しっかりタネを撒いておけば、すぐ結果が出なくとも、次世代を担う子供達に繋げて行けるものがはぐくまれると思います。

5 自分達がいいと思うからやる

市民のことを英語で「シチズン」といいますが、街づくりに関わる人達を「まちずん」と呼ぶそうです。住んでいる人にとって居心地のよい街が「いいまち」であるはず。自分たちがいいと思うからやるのであって、義務や義理でやるものではありません。だから本来まちづくりは、身銭を切ってもやるという人が推進力になっています。念じて実行して行けば、少しずつでもできてくるものです。

みんなにとって「居心地のよいまち」を目指しましょう。(川澄)

横浜の各地域やテーマのまちづくり活動の動きをお伝えします。

北部方面（青葉・港北・都筑・緑区）では、10月4日（日）、都筑区国際プール（ウオーターアリーナ）多目的ホールで第2回「丘の手サロン」が開かれました。

「ヨコハマひと・まち『わ』創り連」横浜北部実行委員会が、3ヶ月に1回、4区の持ち回りで開いているものです。今回は都筑区の委員の担当でした。

約50人が参加し、まず、新しくできた国際プールのすばらしい施設を見学。まちづくりの第一人者で、我々のよき支援者である林泰義氏のお話を伺ったあと、6つのテーブルにわかれ、ワークショップ形式でグループ討議を行いました。テーマは「横浜丘の手まちづくりへの思い」。

自己紹介のあと、各自が問題を提起し、原因と対策を話し合いました。初めて顔を合わせたメンバーが多く、また関心のある分野も広く分かれていたにもかかわらず、議論が盛りあがっていました。

最後に、全グループの発表があり、林さんにまとめてもらいました。

行政の方にも参加いただき、企業からの協賛もいただく等、パートナーシップの「わ」は、確実に広がっています。いろいろな人を知り合うことにより、グループやネットワークの「わ」も拡大しています。

次回の港北区の委員が担当する「丘の手サロン」での再会を期して、家路につきました。

問い合わせ：北部世話人 福富 942-3480

中部では、「ヨコハマ・ひと・まち横丁展 その後お元気ですかイ（会）」として7月から月1回のペースで集まりを持っています。9月も観見、神奈川、西、中、南各区のメンバーが集まり、それぞれの活動のきっかけや課題などを交換しました。11月の都市デザインフォーラムにむけて10月末にもう一度集まり、中部の考えをまとめていく予定です。

問い合わせ：中部世話人 嶋田 623-4550

南部方面では、10月11日、円海山周辺の各地において、円海山ネット祭りが開かれました。メイン会場の横浜自然観察の森には周辺の各地域から20以上もの団体が集まり、各団体同士で盛んに交流が行われていました。昼前には周辺から円海山をハイキングしてきたグループもメイン会場に到着し、午後からの青空シンポジウム「未来につなごう円海山」では、参加パネリストなどから多くの発言があり、最後に「流域・分水界をテーマにした広域的な人のネットワークを模索していこう」とのまとめがありました。

そして、今日の成果を発展させ、円海山の「緑の固まり」を未来につなぐために、『円海山緑地に関わる人の集まる場を創造しよう！』という宣言が採択されました。

また、11月8日には南西部NPOネットワーク講座「環・円海山エコミュージアムシンポジウム」として、岩手県東和町の構想を聞き、横浜南西部から鎌倉にかけての円海山緑地文化圏を「都市型広域エコミュージアム」として成立させるための理念や方策のあり方を議論しました。

南西部NPOネットワーク講座問い合わせ

港南区地域振興課 加藤 847-8392

金沢区区政推進課 相原 788-7727

西部方面の会では、本会の世話人代行である近藤さんの発案で第4回目の視察交流会を、10月17日（土）瀬谷区竹村町の「そば畑」を訪ね、そばの花を眺め近藤さんが打つ新そばに舌鼓を打ちながら、これからの多彩なまちづくりの行く末や夢を語り合うという趣向で行った。小雨降る中、境川沿いの県立瀬谷養護学校裏の「そば畑」に集合。広さ約5,000平方メートルの畑一面には、雪のような純白の花が咲いていた。この辺りは「ヨコハマなのかな」と思えるほどのんびりとした風景。種を8月の下旬に撒き、可憐な花の見頃は10月の中旬、そして刈り取りは11月の中旬から下旬とのこと。この「秋そばの花」が70～80人のおなかを満たしてくれるそう。つい先週にも「そばの花を愛でる集い」が催され、千人近くの方が来園され「そばの花」を

見ながら、手打ちのそばを楽しんだそうだ。

めいめいがこの風情に興じたあと、瀬谷駅の近くの神奈川農産工業(株)の会議室に移る。早速、用意していただいた「知床の最上級の新そば粉」による手打ちそばの実演だ。本日は江戸前の打ち方だそうだ。水まわし、練り、のぼしなど手際良く(さすが本職!)およそ40分で新そばの出来上がり。こしがあり、歯がはずむ。寿命ものびた感じ。

期待通りの感激のあと、まちづくりの活動の話に入る。地域のまちづくりでは特定の課題を解決するだけでは完結しないこと、いろいろな方のノウハウを集合する知恵がとても大切なこと、「方面の会」のように継続的に連携していくことが重要ではないかという意見がでた。また、11月20~23日間行われる「ヨコハマ都市デザインフォーラム」で「市民まちづくり会議」に参加し、地域によって成り立ちがちがうケースを知り、今後の参考にしたいなど。「西部方面の会」としても活動経過をパネル展示したいなど盛り上がる。いつもながら「元気」をもらい、小雨降る秋の午後のひとときを満喫した。来年1月末予定の次の集まりを楽しみにして散会した。(大貫)



福祉のまちづくり市民フォーラムその後の集い

2年前、横浜市の「福祉のまちづくり市民フォーラム」をきっかけにできた「その後の集い」。障害者、ボランティア、商店主、地域でのまちづくり活動者、大学生、まちづくりのコンサルタント、市社会福祉協議会、市福祉局・郡市計画局の職員など、様々な人々の参加のもと、「協働による福祉のまちづくり」を区や地域に拡げるため、ネットワークづくりをすすめながら問題提起をしています。

このたび、第34回身体障害者スポーツ大会・かながわゆめ大会の開催にあたり、市社会福祉協議会のボランティアと共同で「はまっぶ〜飲む・食べる・遊ぶ」という、障害者が楽しく過ごせる横浜のお店を紹介する情報ガイドマップ(無料)を作成しました。このマップは、障害者自身からアンケートを募り、その評判を元にお店に伺うことで、障害者の社会参加について企業や商店街と前向きな新たな関係を取り結ぶことをめざしたものです。

その後の集いが担当した新横浜地区は、2月以降、20通をこえる障害者アンケートや、新横浜町内会(企業町内会)の協力によるアンケートをもとにお店で食べたり飲んだりして「一人の客」として取材をしました。そして、その成果として、この地区には横浜ラポールなどの障害者施設があることで、普段から多くの障害者がお店を利用しているために、障害者とお店のさりげない関係づくりが進んでいることを発見できました。この関係づくりは、今後のまちづくりへの大切な一歩だと思えます。

11月には新横浜町内会や店長さんたちとのマップ完成記念交流会を催すとともに、第2回都市デザインフォーラムでもこのプロセスを展示発表の予定です。ご期待!

(福祉のまちづくり市民フォーラムその後の集い代表 重岡)

横浜市のホームページの中に「ヨコハマ 人・まち」のホームページを開設しました。この印刷物とほぼ同じ内容のものがインターネットでご覧になれます。インターネット版では、バックナンバーもごらんになれます。

(<http://www.city.yokohama.jp/me/hitomati>)

編集:「ヨコハマ 人・まち」編集会議

発行:横浜市都市計画局企画調査課 〒231-0017 横浜市中区港町1-1

TEL 045-671-3512

FAX 045-663-3415

編集後記

この情報誌は、「パートナーシップのまちづくりを進めるための情報誌」という趣旨に賛同して集まった市民と都市計画局企画調査課で作っています。編集会議は、同じような思いを持つ方なら、どなたでも参加できます。また、この情報誌は各区役所、地区センターなどで配布しています。続けて読みたい、という方には個別にお送りいたしますので、ご意見・ご感想をお聞かせください。

第6号編集メンバー:大貫 浩, 金成 耕太郎, 川澄 真知子, 鴻田 益孝, 重岡 昭男, 谷口 和豊, 松井 祐子, 川崎 あや, 賀谷 まゆみ

横浜市都市計画局では、きたる11月20～23日「21世紀に向けた都市活力と魅力的空間の形成—都市の持続的発展と地区からの発想—」をテーマに第2回「ヨコハマ都市デザインフォーラム」を開催します。

そのなかで行われる「市民まちづくり会議」と展示についてご紹介します。



第2回

ヨコハマ都市デザインフォーラム

YOKOHAMA URBAN DESIGN FORUM

市民まちづくり会議「ヨコハマ 人・まちフォーラム」
メインテーマ「地域発意をまちづくりにつなげる」

横浜では市民によるまちづくり活動が盛んに行われています。またこれを支援する様々な制度や市民参加の場面も用意されてきており、今後市民の活動と行政とが関わりを深める中で、「地域発意」をまちづくりにつなげるための取り組みがより一層必要とされてきます。

そこで、地域発意をまちづくりにつなげるための「市民の役割と責任、自立」「市民発意を受け取る行政の仕組み」「地域合意のあり方」について、それぞれグループに分かれて、横浜や他都市の事例をもとに議論します。

(2) 市民セクターの役割と責任、自立②「活動団体のネットワークによって何が可能になるか」

【ゲスト】樽井 彰子氏（鎌倉市・市民活動センター運営会議事務局長）

(3) 市民発意を受け取る行政の仕組み①「まちづくり条例・まちづくりセンターの有効性と課題」

【ゲスト】梅津 政之輔氏（世田谷区・太子堂まちづくり協議会）

(4) 市民発意を受け取る行政の仕組み②「行政の市民参加事業のあり方」

【ゲスト】松井 隆一氏（川崎市宮前区・平瀬川流域まちづくり協議会事務局）

(5) 地域合意のあり方①「地域合意とは何か？」

【ゲスト】平出 隆氏（旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会事務局）

(6) 地域合意のあり方②「地域合意をつくりだすための組織とルールとは」

【ゲスト】吉田 芙子氏（中央林間北自治会環境部会長）

日時：1998年11月21日（土）18:00-20:00

会場：パシフィコ横浜会議センター3階ラウンジ（桜木町駅徒歩15分）

参加費：無料 *事前にお申し込みください。

都市計画局企画調査課担当：賀谷 TEL：671-3512

FAX：663-3415

(1) 市民セクターの役割と責任、自立①「市民自らが担う役割と責任とは？」

【ゲスト】新井 美沙子氏（東京ランポ代表）

まちづくり展示「ヨコハマ 人・まち」

「ヨコハマ都市デザインフォーラム」開催中、横浜市内のまちづくり活動と、横浜市における活動支援・市民参加型事業を紹介する展示を行います。

日時：1998年11月20日（金）～23日（月）

会場：クイーンズスクエア横浜内クイーンモールギャラリー（桜木町駅徒歩10分）

入場料：無料

